

3年 社会科学習指導案

授業者 川井 空鈴

1. 単元名 届け！真っ赤な幸せ～最高の一粒ができるまで～（地域に見られる生産や販売の仕事）

2. 単元の目標

- 静岡市のいちご農家について、生産者の仕事に着目し、話を聞いたり見学に行ったりする中でいちごを生産する上でのこだわりや工夫を理解する。〔知識及び技能〕
- いちごの生産について、栽培工程を手作業で行うのか、または機械を併用するのかという選択をしたいちご農家の情意にふれることで、生産者がいちごを生産するこだわりを自分の言葉で表現する。〔思考力、判断力、表現力等〕
- いちご農家の生産や販売について主体的に追究することで、農家の人たちの仕事に対する思いや自分たちの食生活を支えてくれていることに気づき、学習したことを日常生活で生かそうとする。〔学びに向かう力、人間性等〕

3. 子どもと教材

本学級の子どもは、それぞれが自分なりの思いや意見をもち、生活場面と社会的事象について結び付けて考えることができる。社会科「わたしのまち みんなのまち」の授業では、学校の周りに何があるのかを自身の経験を想起して話し合いを展開していった。「バス停まで歩くから～」「電車を使うから駅があるよ」などと自らの生活場面から意見を出している子が多かった。その後、実際に自分の意見を確認するために、校舎の屋上から学校の周辺を見てみると「学校の屋上に立ってもまだ高いビルが多いんだね」「方角によって見えるものがそれぞれ違うけど、山だけは全部の方角にあると思う！」などと、見たものから話を広げていた。単元が進み、学区探検に行く準備をする際には、時間が限られていることから学区全てを把握することが難しい状況に直面した。解決方法として、自分たちが学習した地図記号を使って書く時間を短縮することや情報端末の地図を使って、目的を達成する方法が提案された。市外や葵区以外の地域から通っている子が多いことから、学校の周りのことをよく知らないという子たちが多く、探検に行く際に地図を持っていく必然性が生まれた。しかし、情報端末が目的地まで案内するという生活経験から、子どもたちは「スマホか iPad 持っていけばいいんじゃない？」という発言をした。Wi-Fi 環境の理由により、情報端末は使用することができないことを伝えようと、昔の人は情報端末を使わずに紙の地図のみを使って目的地まで行けていたことがすごいと感銘を受けていた。更に AI が発達すると、世の中は便利になるのかという観点で議論が展開された。子どもは「ならない」「半分なるけど便利にならないことの方が多い」という意見を次々に挙げた。理由として、「全部ロボットになると働く人がいなくなる」「働く人がいなくなるとお金がもらえないから生きていけない」「ナビとかでは大活躍するし、便利だけどそれ以外では困ることもあると思う」と話していた。

一方で、他者の頑張りを見て自らも行動していこう、あえて大変なことを進んでやろうという点において集団としての伸びしろがあると感じている。運動会の学年練習の片付けでは、実行委員が準備・片付けを行っていた。準備は、多くの子たちが必要な道具を自ら見つけ率先して動いていた。しかし、片付けになると、残って片付けを行っていたのは運動会の実行委員のみだった。終わりのチャイムが鳴ると同時に走って教室に戻っていく子がいる中、ある子は、走って道具を取りに行き、「あと何があるかな」と周りの様子や他のクラスの様子を観察しながら働いた。ある子は、友達と一緒に重い道具を力を合わせて楽しみながら運んでいるようにも見られた。そして、全ての片付けが終わり教室に戻ろうとした時「あそこに誰かの水筒が残ってる」と言いながら、走って取りに行き担任の先生に「先生赤組のだった、持っていくね」と動いている子もいた。自分で決めた役割の実行委員という立場を全うするという意味では、当たり前なことなのかもしれない。実行委員でない子たちが自分たちのために片付けを行ってくれているということに気付いている子はどれくらいいるのだろう。また、実行

委員でなかったらこの子たちの働きぶりはどうなったのだろう。個や集団の目標を達成するためには、あえて大変なことを選ばなければならないこともある。

本単元で扱ういちご農家はあえて機械化を進めずに手作業で行っている。また、実際に農家自身も「AI とは真逆の世界で私はいちごを作っていくと思う」と語る。身の回りのことが機械で行える便利な世の中となっていく一方、あえて効率の悪いアナログな世界で仕事を進めていくことや労力を伴ってでも大変な方法を選択している。子どもは、いちご農家の坂下さんと出会い、こだわりをもってあえて困難な道に向かっていく姿にふれていく。そして、労力を伴う選択をした結果として、その先にある消費者が何回も買いに来てくれるという坂下さんの喜びを感じ取るだろう。300 坪にも及ぶいちご農園を所有する坂下さんはすべて手作業で、毎日一つ一つのいちごと向き合っている。水、温度、肥料の配合などをその日のいちごの様子と気候などから考えている。いちごの収穫においては、腰をかがめ、低い姿勢で行わなければならないとても大変な作業である。坂下さんがいちごを作り続ける理由は「自分が取ったいちごを安心して食べてもらいたい」「社会科見学で、地域の子たちに農業に関心をもってもらったり、将来を考えていくときに記憶に残ったりするような手助けができればいいな」という熱い思いが起因しているからである。効率を重視した機械を併用する農業ではなく、自身の目的を達成するためにあえて手作業という困難な道を選択した坂下さんの思いは、本学級の伸びしろと重なると思われる。坂下さんのいちごに対する熱い思いに出会うことで、日頃の学校生活において、個や集団の思いを実現するためにどんな方法が本当によいのかと立ち止まって考える一助となることを願う。



4. 本単元に願う『その子らしく学ぶ』

子どもは、第①時でいちごについて知っていることを共有していく。これまでの経験から「いちご狩りでいちごがなっている様子をみたよ」「一つの苗からたくさんのいちごがなっているよ」と振り返るだろう。子どもはいちごについて知っていることを共有していく中で「どうして一年中収穫することができないのだろう」「どのようにいちごは成長していくのだろう」という疑問が生まれるだろう。そこで第②時では、2年生時に育てた野菜のことを手掛かりにいちごの栽培過程を考えていく。水のあげる量や肥料、太陽の当たり方などがこれまでの経験からいちごにも必要であると考えた子が出てくるだろう。さらに、農家はいちごを収穫した後どんなことをしているのかと疑問を抱く子もいるだろう。それらの疑問を解決するために、第③④時で社会科見学に出かけ坂下さんと出会う機会を設定する。実際のいちごハウスを見て、ハウスの広さや苗の量に衝撃を受ける子が多くいるだろう。低いところになっているいちごを手作業で収穫することや、膨大な量のいちごを育てている現実を知り、いちごに対する疑問から少しずつ農家の仕事内容やどのような思いで仕事をしているのかに着目していく。坂下さんに出会い、あえて手作業にこだわっているという情意にふれることで「なぜ大変なことに時間をかけて取り組むことができるのか」と自らと重ね合わせて考えていく。第⑤時では、社会科見学を振り返る機会を設定する。子どもは、感じたことを率直に意見交換していくだろう。その中から生産に焦点をあてることで、農家が直面している課題に向き合う。300 坪という膨大な土地を管理し手作業で収穫していることなど、農家の苦労を実感していくだろう。そして子どもは「大変な思いをしているのにも関わらず、このような作業をどうして続けることができるのか」という疑問を表出していく。社会科見学で坂下さんの情意にふれた子どもは、いちごへの熱い思いがあるから頑張れる、食べてくれる人の笑顔を見るために苦労しているという思いを抱くだろう。一方で、仕事内容をもっと楽にできる部分があるのではないかと考える子もいるだろう。そこで、第⑥時では、どうしたら楽に栽培し、収穫ができるのかを考えていく。身の回りに便利な機械が多くある世の中で生活している経験から、ある子は「ロボットの導入や機械に頼ることができる部分を増やすとよい」ある子は

「もっと働く人を増やして、一人の負担を減らせばよい」と語るだろう。そこで、農家で実際に行われている AI を活用した栽培方法の資料を提示する。子どもは、自身の考えの根拠を得ることで自分の思いをより強くしていくだろう。農家の仕事を楽にするための解決策をもった上で、第⑦時（本時）では「世の中は AI が発達してどんどん機械化が進んでいくけど、僕は時代に逆行して自分の手でこれからも農業を進めていくと思う」という坂下さんの情意を含んだ話型資料に出会う機会を設定する。この坂下さんの情意にふれた子どもは「機械を導入すれば楽になるのに、なぜその方法をとらないのか」という切実な問いを抱くだろう。ある子は「手作業にこだわっていちごの様子を自分で確かめたい」と言うだろう。ある子は「少しでも作業の負担を減らすために機械を使うべきだ」と言うだろう。その中で、AI と人の手のどちらが良いかの二項対立的な討論をしていくのではなく、二つの思いを理解した上で、坂下さんや農家の人たちが大切にしたい思いは何かについて考えていく。AI では感じられない人の温かみや自分の納得のいくいちご作りを進めていくことの大切さ、大変なことをした先にある消費者の笑顔など、苦勞をしないと得られないものがあることに気付くことを期待したい。そして、気付いたことから、自身の生活を見つめ直し、目標を達成するために困難であっても安易な選択に流されることなく、立ち止まって本質を見極めることの一助となることを願う。

5. 単元構想（全 8 時間扱い／本時は第⑦時）

<教師の投げかけ> 子どもの表れ 最終時における子どもの表れ

○教師の働きかけ

① <いちごについて知っていることってある？>

- ・ビニールハウスで育てているのを見たことあるよ
- ・久能の方に石垣でいちご育てていたよ
- ・いちご狩り行ったときは、高いところにいちごがなった
- ・静岡でもいろんな種類のいちごを作っているよ
- ・どうやって苗って作っているんだろう
- ・まだまだ知らないいちごのことがありそうだね

○子どもが関心を高めるために静岡市で有名ないちごの葉や作業している様子の写真を提示する。

もっといちごについて色々調べてみよう

○生活科や理科の学習と関連付けながら栽培について経験を踏まえて話ができる機会を設ける。

- ・水ってどうやってあげているのかな
- ・収穫は誰がやっているんだろう、一人でやるのは大変そうだな
- ・苗をたくさん増やすのにどれくらい時間かかるのかな
- ・収穫の時期が終わったら暇になるよね、何するのかな
- ・いちご以外には何も育てていないのかな
- ・なんでいちご農家を始めたんだろう
- ・大変なこととかあるのかな
- ・2年生の時に野菜育てたよ、収穫したら終わりだったね

○これまでの生活経験のことを想起するために2年時に育てた野菜の話題を挙げる。

② 野菜を育てた時と比べてみよう

- ・自分の好きな野菜を育てて収穫して終わりだったよ、いちごもおわるんじゃない
- ・いちごが収穫して終わったら残りの期間何するのかな、お仕事なくなっちゃうよ
- ・苗から育てたよ、だから苗を作っている仕事もある気がする
- ・種から育てるんじゃない
- ・苗が枯れちゃったりして育てるの大変だった

○野菜を収穫したときの苦勞を想起させ、生産者の気持ちを理解しやすくする。

○子どもが生活科の経験と関連付けて話ができるようにこれまでの学習とのつながりを想起するような問いかけをしていく。

いちごハウスの見学に行こう

- ・ 苗が植えてある所が意外と低くてびっくりした
- ・ 思っている以上に広い面積で驚いた
- ・ 水や肥料を土の中からあげていたことにびっくりした
- ・ 収穫できるか見極めるの大変そう

- ・ こんなに広いとお金がたくさんかかりそうだね
- ・ 最初からこんなにたくさんの苗があったのかな
- ・ こんなに広い土地をどうやって毎日管理しているのかな
- ・ いちごが思っていたよりも下の方にあるから収穫する時めっちゃ大変そう

⑤ <社会科見学を振り返ろう>

- ・ いちご狩りに行くときは楽しく食べているけど、スーパーで売られているのは大変なことが多いことが分かった
- ・ 農家さんの仕事は簡単で楽しいことばかりではない
- ・ 想像していた以上に大変なことが多かった
- ・ もっと大事にいちごを食べようと思う
- ・ いちごへの思いが強いからあんな大変な仕事、私なら続けられないかも
- ・ 畑が大きすぎてびっくりしたよ
- ・ 野菜を育てた時とは大変さが違ったよ
- ・ いちご農家に将来なりたいなあ
- ・ いちごのシーズンが終わったらやることないと思っていたけど忙しくてびっくりした
- ・ いちごがない時期の葉っぱが見れて普段見られないからよかったよ
- ・ 野菜といちご似ているところもたくさんあったよ
- ・ 機械にもっと頼ればいいのにな

⑥ <どうしたら少しでも楽にいちごの栽培や収穫ができるのかな>

【収穫】

- ・ ロボットを使った方が収穫は楽にできそう
- ・ 働く人増やせば、収穫の一人の負担が少なくなるよ
- ・ ロボットに収穫されているいちごは温かみを感じないなあ
- ・ 人の手の方が温かい

【栽培】

- ・ 人間の手で育てないといちごをつぶしちゃう
- ・ ロボットに頼ると、人間の働く場所がなくなるよ
- ・ もっと機械に頼れば絶対に楽に栽培できると思うな
- ・ ロボットと人の手ダブルでやったら？
- ・ 肥料の配合計算できる？

○自らの疑問を解決するためにいちご栽培の方法や農家さんの思いを直接聞くために見学に行く機会を設定する。

○いちごの栽培時期以外にも農家には多様な仕事があることを理解するために実際の農家の年間スケジュールについて説明していただく。

○思考を整理するために、インタビュー結果などをまとめる際に、いちごと生産者に分けてメモができるようにする。

○第⑤時ではいちご農家の仕事の大変さを捉えるために、個々が感じたことを共有する場を設ける。

○農家の情意に触れるためにどんな思いで仕事をしているのか問いかけていく。

○農家が仕事を続けている理由を想像するために、どんなことがやりがいなのか問いかけていく。

○子どもが、農家の収穫作業における困り感を共有し、解決策を出すために、社会科見学を想起しつつ仲間と交流する機会を設ける。

○収穫と栽培においてAIを取り入れるメリットを理解するために、作業効率に視点を絞っていくよう促す。

<こんな記事見つけたよ>

- ・やっぱり AI の活用ができるといいことあるかもしれないね。
- ・でも、収穫ではやっぱり頼れないのかなあ
- ・全部 AI に頼ると、働く人がいなくなってしまうから、AI を使う所と使わないところを分けて行けるといいのかもしれない

⑦ (本時) <いちご農家坂下さんにみんなの意見提案してみたよ>

坂下さんに採用されたかな。やっぱり機械化した方が良さね

<坂下さんは「時代に逆行して手作業でやる」と言っているよ>

- ・絶対 AI 活用した方が良さよ！収穫するのすごい大変そうだったもん
- ・なんでわざわざ大変な道に進むのかなあ
- ・AI に頼らないともっといいことがあったりするならわかる。
- ・自分が苦しくなるだけな気がするけどなあ

- ・自分の手でやりたいって気持ちわかる気がする。それだけ、いちごのことを大事にしている証拠じゃない
- ・あえて大変な道に行くことは辛いけど、食べてくれる人たちのことを考えたら頑張れるんじゃないかな
- ・見学に行って自分でやりたい気持ち私もわかる

<農家さんが大切にしているものって何だろう>

- ・AI が良いこともわかるけど、人の手でやるのが大事にしているような感じがするよ
- ・いちごのことをすごく大事にしているのが伝わってきたから、いちごを育てる気持ちが大切なんじゃないかな
- ・大変なことをいろいろ時間を掛けてやっているからいちごがおいしく育っているんだと思う
- ・やっぱり AI ではできないことがたくさんある。作る人の思いとかはロボットでは感じられない
- ・いちごに対する思いがとても強いと感じた。それだけ、大事にしているんだと思ったよ

⑧ <学んだことを振り返ろう>

- ・どうしたら自分が楽できるのかを考えるのではなく、いちごのためにどんなことができるのかを考えていた
- ・大変なこと、辛いことだったとしてもその先にある笑顔のためなら頑張る気持ちがすごいと思う。すこし大変な道だったとしてもやってみようかな
- ・一つのことに夢中になるってすごくカッコいいなと思った。たまには、大変なこともやってみようと思う
- ・周りの人をすごく大事にしていた。自分も周りの人をこれからも大事にしていきたい
- ・スーパーに売っているいちごを見たら農家さんの顔が浮かびそうだね

○子どもが自身の考えの根拠を見出すために、農林水産省から出されている AI を活用した農家の資料を提示する。

○子どもが、AI の良し悪しではなく、坂下さんのこだわりを捉えていくために必要に応じて情意にふれることができるような問いかけをする。

○A 男がなぜ坂下さんが手作業にこだわっているのかを捉えていくために、人と機械の違いについて整理する。

○農家の熱い思いを共感するために、日常生活の具体の場面と結びつけて考えられるように問いかけていく。

○子どもが、今までの学習からいちごそのものの価値を見つめ直せるように関わる。

○坂下さんの生き様を子どもが正対するために、これまでの学習を振り返る場面を設定する。